

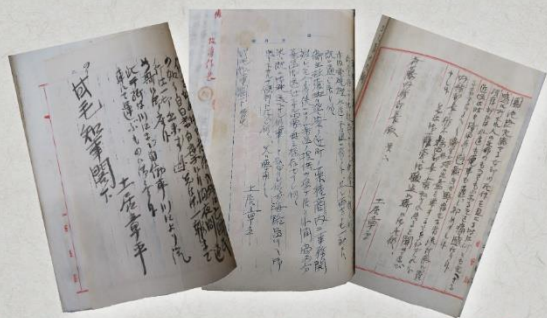
関東大震災 100年

奈良県理事官が見た帝都



黒煙の中の日比谷交差点（東京都復興記念館所蔵資料）

※この画像は震災当時の技術で一部改変されたものです



聞きしに勝る大惨状
…まずは第一報

令和5年

8/29(火) --- **9/28**(木)

■開館時間：9:00～20:00

会期中、毎週月曜日休館（ただし9月18日（月）は開館）、8月31日（木）
9月19日（火）も休館

■展示場所：奈良県立図書情報館3階ブリッジ



折れた凌雲閣を爆破（東京都復興記念館所蔵資料）

ごあいさつ

1923年9月1日午前11時58分、マグニチュード7.9と推定される巨大地震が関東地方を襲いました。関東大震災です。

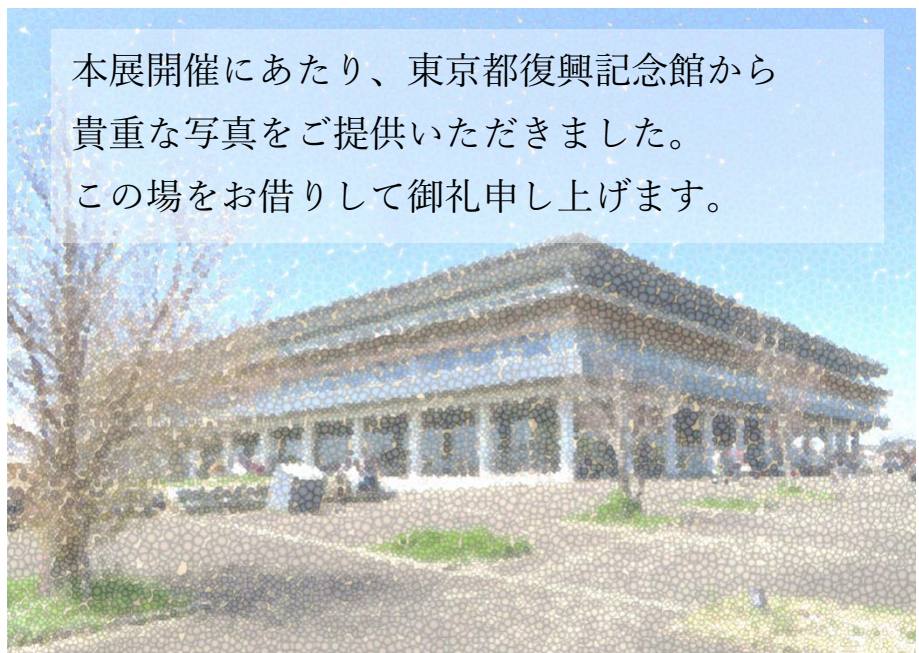
奈良県では被災地救援のため急遽、土居理事官を総指揮として職員6名、医師・看護師等救護班4名を東京に派遣しました。9月4日、東京に上陸した派遣団が目にしたのは変わり果てた帝都の姿と想像を超える惨状でした。

理事官が綴った被災地の状況を伝える手紙とともに、義援金、救援物資募集の公文書、当時の新聞・雑誌で災害発生の様子や被害状況を紹介いたします。また、関東大震災や復興に関する図書も併せて展示いたします。

震災から100年の節目を迎える今年、関東大震災を知り、学び、考える機会となりましたら幸いです。

※展示の解説では、当時の言葉をそのまま使用しております。

本展開催にあたり、東京都復興記念館から貴重な写真をご提供いただきました。
この場をお借りして御礼申し上げます。



関東大震災

発生日時: 1923年(大正12)9月1日午前11時58分

震源: 相模湾北西部

地震の規模: マグニチュード7.9(推定)

最大震度: 6 ※当時の震度階級は震度0から震度6までの7階級
相模湾沿岸地域や房総半島南端では、現在の震度7相当の揺れであったと推定されています。

津波: 伊豆半島、伊豆大島、三浦半島、房総半島の海岸
(静岡県熱海では最大12m)

死者・行方不明者: 約10万5,000人

住家被害棟数: 約37万棟

関東大震災が起った9月1日は半日勤務の土曜日。職場では仕事を終えて帰宅準備を、家庭では昼食の準備をしていたと思われる午前11時58分に相模湾北西部を震源とするマグニチュード7.9と推定される巨大地震が occurred。

この地震により、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県で震度6を観測したほか、北海道道南から中国・四国地方にかけての広い範囲で震度5から震度1を観測しました。当時の震度階級は震度0から震度6までの7階級でしたが、家屋の倒壊状況などから相模湾沿岸地域や房総半島南端では、現在の震度7相当の揺れであったと推定されています。

9月2日の大阪朝日新聞では1日の正午前に大阪でも強震があり、大阪本社の鉄筋コンクリートの建物でも相当な揺れを感じたと報じています。また、大阪測候所の話として明治24年濃尾地震以来の大阪で強く感じた揺れだと報じています。

本震ののち、12時1分、12時3分頃にもマグニチュード7以上と推定される巨大な余震が続きました。昼食準備の火の使用と重なり、倒れた家屋から次々と火の手が上がり、東京市・横浜市を中心に大火災に見舞われました。東京市で火災がおさまったのは3日の午前10時。約46時間にわたって延焼が続いたこととなります。

本所区被服廠跡地では避難していた約3万8,000人が犠牲となりました。東京市の火災による死者約6万6,000人のうち半数以上がここで亡くなったこととなります。関東大震災の犠牲者約10万5,000人の約9割が火災で亡くなりました。

政府では震災発生の8日前の8月24日、加藤友三郎首相が病死。地震発生時は内田康哉外相が首相を臨時兼任していました。28日には山本権兵衛に後継内閣の組閣が命じられていましたが、難航していたため、まだ組閣途上でした。地震発生により組閣は急がれましたが第二次山本権兵衛内閣が成立するのは9月2日夜のことです。

大正十二年九月一日 関東に於ける大震災大火災鳥瞰図



(東京都復興記念館所蔵資料)

この鳥瞰図では震源の相模湾を中心に、東は筑波山から西は静岡までが描かれています。東京や横浜だけではなく、鎌倉や横須賀、甲府など各地で火災が発生したことがわかります。震災の犠牲者約10万5,000人のうち9割が火災で亡くなりました。

また火災のほかにも揺れによる倒壊や液状化、津波、土砂災害などさまざまな被害が広範囲にわたっておこりました。静岡県熱海では最大12m、房総半島の相浜でも9mの津波が来襲。国鉄熱海線の根府川駅では地すべりにより土砂が駅を襲い、停車中だった列車も巻き込まれ海中に没しました。

【参考文献】

『関東大震災 大東京圏の揺れを知る』武村雅之著 鹿島出版会 2003

『関東大震災と鉄道』内田宗治著 新潮社 2012年

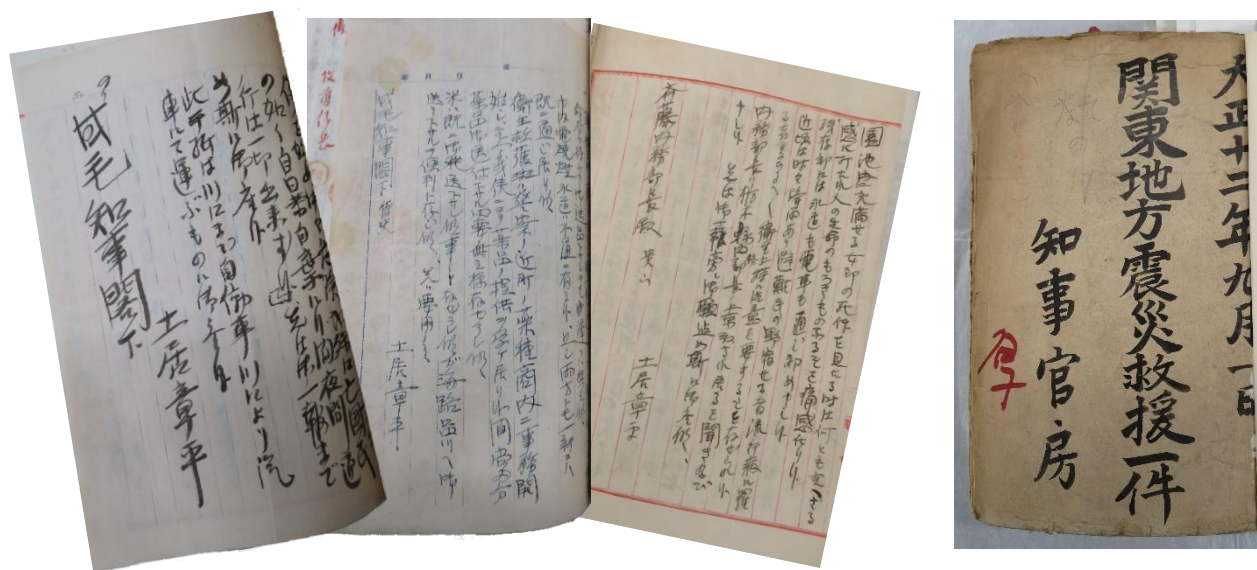
『1923 関東大震災 報告書 第1編』中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会 2006年

『1923 関東大震災 報告書 第2編』中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会 2009年

救援・救護団の派遣

奈良県庁では関東地方大震災の情報が入ると、9月2日に職員幹部を集めて緊急会議を開き、職員 6 名と、救護班として医師・看護婦ら 4 名の派遣を決めました。しかし、東京の状況は混沌として知る手がかりもなく、どのような交通手段で東京に向かえばよいのか苦慮していた時に、駆逐艦が大阪港に入港するとの情報を耳にして、すぐに船に便乗する許可を得ます。派遣団は 2 日の午後 11 時 30 分に大軌電車で出発し、翌 3 日、駆逐艦「葵」に乗船。午後零時 40 分大阪港を出発し、4 日の正午、品川に到着。午後 3 時半に芝浦に上陸しました。

派遣団の総指揮者をつとめた土居理事官の手紙とともに震災直後の帝都の状況を見ていきたいと思います。



「大正十二年九月一日 関東地方震災救援一件 知事官房」(奈良県庁文書)

請求記号:1-T12-2
資料 ID:556004412

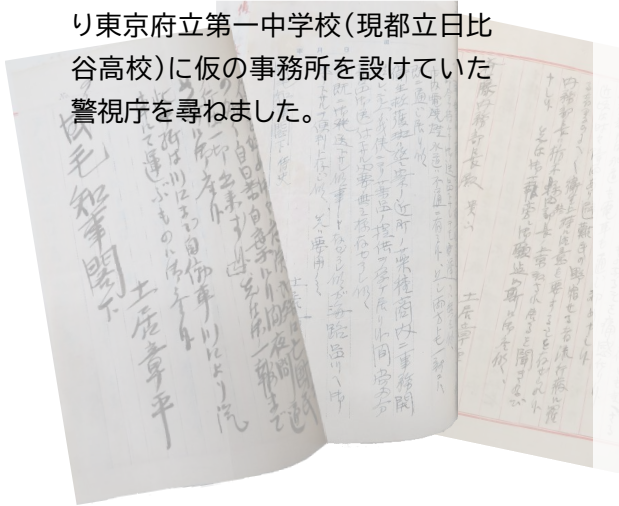
土居理事官から奈良県知事宛の手紙

写真の一番左は、東京到着後、すぐに帝都の様子を報告した 1923 年 9 月 6 日ごろの手紙です。焼け野原となった東京の街を視察し、死体の山を目の当たりにして「聞きしに勝る大惨状」と伝えています。

派遣団の総指揮者をつとめた土居章平は当時満 30 才。内務省の職員として奈良県に赴任し、理事官として勸業課長をつとめていました。土居理事官の手紙には、震災直後の東京の様子が綴られています。

帝都へ

9月2日奈良を出発した派遣団は3日の正午、大阪から船で東京へと向かいます。翌4日の午後3時半、芝浦に上陸すると、本庁舎焼失により東京府立第一中学校(現都立日比谷高校)に仮の事務所を設けていた警視庁を尋ねました。



前略御免
三日十二時大阪港発
四日十二時東京港着、
芝浦上陸は三時半、
大阪府救護団は貨物陸揚に
何等の設備無之ため上陸見合せ、
奈良県のみ全部上陸。
芝浦より警視庁迄三田署の自働車にて送り呉れ申し候。
警視庁は目下日比谷公園裏
第一中学内に仮事務所を設け居り候。
衛生部長に來意を告げ自働車にて
慘状を視察致し候。

No.1

聞きしに勝る 大慘状

東京市※内を視察した派遣団が見たのは、想像を超える慘状でした。最も被害の大きかった被服廠跡では「三千人」の死体が残っていたと報告していますが、実際には約3万8,000人の方がここで亡くなりました。

※東京市:東京府(現東京都)にかつて存在した市。東京府の都心部15区を区域としていた。

聞きしに勝る大慘状、
本所・深川・日本橋・浅草・京橋・下谷・神田の全部、
靴町・本郷・芝の大半、
小石川は砲兵工廠、早稲田大学等の点々
焼失致し居り候。
死人の山を突見仕り候。
死人の最も多きは本所区元被服廠跡
空地にて三千人避難致し居りしに
火災四周より來り其まゝ相抱いて
黒こげに相成り居り、
子を手に固く抱いたるまゝ、倒れ居る者も有之候。
何とも云へぬ感致し候。
空地なるが故に三千人の死体も残り候も
其他は幾万の人家と共に消え失せたるものに有之候。

No.2

出来るだけ早く 食料品を

帝都の状況を知るため、急いで出発した一行でしたが、十分な救援物資を携えていなかったためか、心苦しいと報告しています。
また、多くの官庁舎が焼失した東京の惨状に、京都や大阪に首都を移すほかないのではとも記しています。

(省略)
然し材料なしでは却て心苦しく
人よりも物を要求致し居ること切に候間、
出来るだけ早く食料品を御送り下れ度、
市民は玄米を食ひ居り、
白米等は中々手に入り様無之候。
大蔵省・内務省・農商務省・逓信省・
鉄道省・警視庁全焼に候。
宮城も全部落壁又は亀裂を生じ居り、
帝都は京都又は大阪に移さざるを得ずと
直感致し候。

No.3

混乱下の流言

混乱する帝都では、朝鮮人や社会主義者が放火したなど、多くの流言(デマ)が流れていました。
夜間は武器の携帯が許されているため、殺傷が始まり危険だと伝えています。

(省略)
朝鮮人放火は多くの証拠あるらしく
鮮人とさへ見れば市民之をなぐり殺し
軍体迄之を銃殺する有様にて
警視庁は之を保護旁々收容致し居り候。
夜間は真暗にて戸外避難民は
夜間は武器携帯許され居り候間、
互殺傷を始め中々危険、
殊に亡国民の如く自暴自棄に候間
夜間通行は一切出来ず候。
先は第一報まで如斯に御座候。
此手紙は川口まで自働車、
川口より汽車にて運ぶものに御座候。

成毛知事閣下

土居章平

No.4

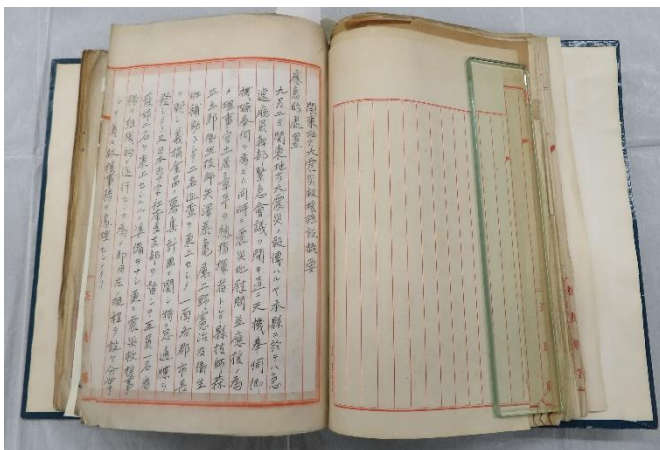
東京市火災動態地図



『震災予防調査会報告 第100号』1925年所収

火が襲ってきた時刻と方向を示した地図です。東京帝国大学の学生有志、約30名が震災後の9月下旬から10月中旬まで焼失地域で聞き取った情報をもとに作られています。理事官の手紙でも触れられていますが、広い空き地になっていた被服廠跡では、避難していた3万8,000もの人が亡くなりました。火災動態地図を見ると、四方から炎が迫り、逃げ場のない状態になっていたことがわかります。

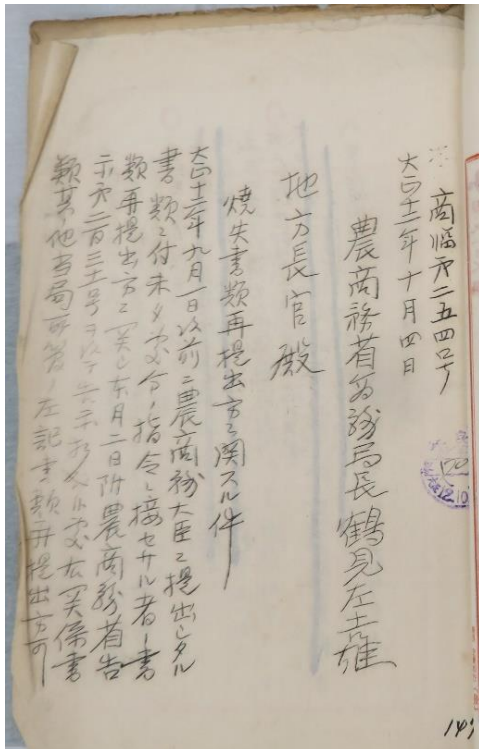
関東地方大震災救援施設概要



「関東地方震災救援一件(二)知事官房」
(奈良県庁文書)

奈良県がおこなった救護活動の概要をまとめた文書。震災直後、首相を総裁として開設された臨時震災救護事務局は救護活動を調査・編纂するため、各県に救護活動の報告を求めました。奈良県では、救援・救護団の派遣の経緯や奈良県を通る罹災者に対する救護活動、義捐金品募集の方法や支援物資の内容などをまとめて報告しています。

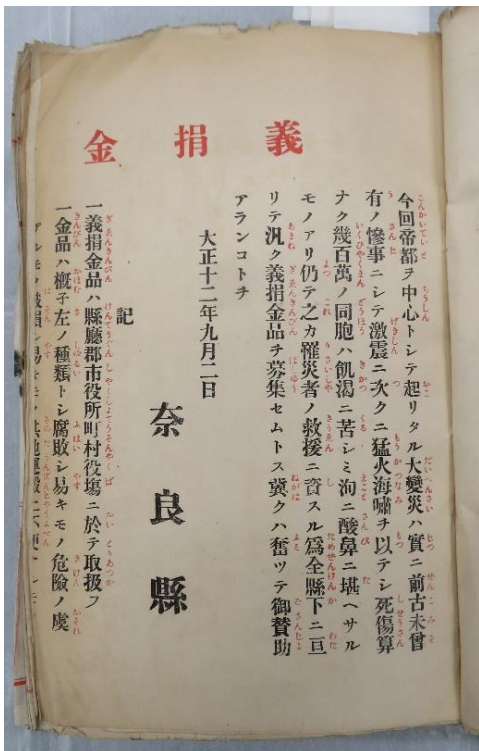
請求記号:1-T12-3 資料ID:556004413



焼失書類再提出方ニ関スル件 (農商務省)

震災により農商務省の本庁舎が焼け、文書も焼失しました。そのため、未処理の事案については文書を再提出するよう、大正12年10月4日付けで告示が出されています。中央官庁では農商務省のほかにも大蔵省、文部省、逓信省、鉄道省の本庁舎が焼失しました。

「大正十三、十四年 取引所一件」(奈良県庁文書)
請求記号:1-T13-51 資料ID:556004488



義捐金品募集

5万枚印刷し、県内の2軒につき1枚の割合で配布しました。震災の甚大さが日に日に分かってくると、罹災者への食糧・被服の寄贈も増えていったため、9月6日には義捐金品の募集を15日までに短縮すると各郡と市に通知しています。

「大正十二年九月 震災救援ニ関スル書類 庶務課」
(奈良県庁文書)

請求記号:1-T12-18 資料ID:556004430

奈良県の救援・救護活動

奈良駅での救護活動

奈良駅構内では9月9日から20日まで、のプラットホームに救護所を2カ所開設。婦人会と市内寺院の僧侶が協力して昼夜交代しながら救護にあたりました。列車がくると避難者がいないか尋ね、湯茶や弁当、衣類、手拭、仁丹、菓子などを避難者に手渡しました。奈良での宿泊を希望する避難者には市内寺院に宿泊させました。

奈良駅を通過した避難者は約2,500人。奈良駅で下車したのは約187人と記録されています。

震災地での救護活動

9月2日、第一救護班として医師1名、薬剤師1名、看護婦2名を東京に派遣。17日間救護活動を続けました。また、第二救護班として9月4日、医師1名、薬剤師1名、看護婦2名を横浜に派遣。9日間の救護活動を行いました。

救援物資

第一回(9月6日)は白米540石と梅干70樽を購入し、寄贈救援品とともに貨車23輛に積んで大阪湊町駅に輸送しました。翌朝、数百輛の牛馬車に乗せて築港に陸上輸送し、午後7時に全てを運び終えます。奈良県は孤立無援の状態にある神奈川県小田原の危急を救援するため、これらの寄贈品の多くを小田原に運ぶこととし、三菱商事会社の特別仕立ての救護船「三瓶山丸」に依頼して、今西穀物検査所長便乗の上、同地に向けて出発しました。なお、第二回輸送(9月8日)には白米470石、第三回輸送(9月14日)は白米490石を購入し、寄贈品とともに輸送しています。

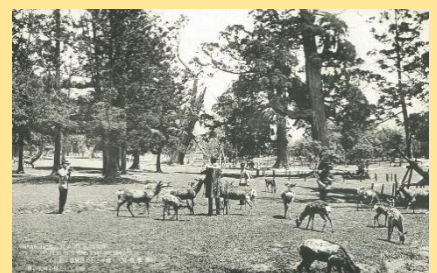
食料品のほか、箸や杓子が必要だとわかると、急遽、係員を吉野郡下市町に派遣して割り箸100万人分、杓子6万個を調達し、9月14日、大阪港に向けて輸送しました。

義捐金品

奈良県では10月20日までに以下のような寄付金品が集まりました。

寄付金：443,666円57銭

寄贈物品：白米1,379俵、梅干408樽、衣類818包、
漬物382樽、野菜類903俵、
醤油17樽、慰問袋146包み、その他678個
※寄贈衣類物品は愛国婦人会と私設婦人会が協力して、
洗濯、繕い、整理をして送られました。



絵葉書（当館所蔵）

拝啓

其後救護事務等のため

さぞ御疲労の御事と拝察仕り候。

早速御手紙差上げべきの処

早朝より薄明迄震災事務局に

勤務致し居り候ため

今日迄失礼致し候段、悪からず

御免下され度候。

（省 略）

内務省、農商務省等は普通事務は一切出来ず

救済事務にも人手足らぬ状況にて

地方理事官中の若年者を召集して

事務手伝いを致させ居り。

愚生も帰庁の命を受け内務省に挨拶に参り候処、

引き留めを食ひしものに有之候。

此月中位か又は何日間執務すへきか

今の処不明に有之、

各県より理事官出向し居るに見れば

近藤保安課長に交替して戴く事も

不可能の様に存せられ候。

（省 略）

未だに半白米を食ふ日多く

料理店等は一切開かず

洗濯屋も湯屋も開業せず

極めて不自由なる生活を致し居り

生れて始めて宿直を致し居り候。

本所横網町被服廠跡地の三万人の死屍、
吉原公園池内に充満せる女郎の死体を
見たる時は

何とも言へざる感に打たれ

人の生命のもろきものなるを痛感仕り候

残存部には水道も電車も通じ初め申し候。

近頃は時々降雨あり、

避難民の野宿せる者

流行病に罹る者多かるへく

衛生上特に注意を要することと存せられ候。

（省 略）

先は御一報旁々御願迄如斯に御座候。

（省 略）

先は御一報旁々御願迄如斯に御座候。

（省 略）

土居章平

齊藤内務部長殿 貴下

土居理事官が9月半ばに奈良県庁の内務部長に宛てた手紙です。震災地では、人手が足りず、各地の地方理事官が救済事務を手伝っていると報告しています。土居理事官も奈良県から帰ってくるよう命じられますが、引き止められ、臨時震災救護事務局事務官を命じられます。義捐金品の事務に従事し、奈良県に帰ってきたのは11月8日でした。

東京では震災地の状況と必要な物資を県に伝え、在京県民の安否を確認し、帝都に集まる義捐金品の受納事務に携わる忙しい日々を過ごしていたと思われます。手紙は県への報告を中心に書かれていますが、「本所横網町被服廠跡地の三万人の死屍、吉原公園池内に充満せる女郎の死体を見たる時は、何とも言へざる感に打たれ、人の生命のもろきものなるを痛感仕り候」と記すなど、惨状を目の当たりにした理事官の胸中も伺えます。

土居章平

明治25年(1892)10月に岡山県で生まれる。大正8年(1919)東京帝国大学法科大学を卒業。内務省へ入省。奈良県には大正12年4月に理事官として着任。同年の9月に関東大震災発生し、救援・救護団の総指揮者として東京に派遣される。

その後、愛知・山口県の理事官、岐阜・青森の警察部長などを経て、昭和13年(1938)には山梨県、昭和15年に石川県、昭和16年には新潟県の官選知事として赴任。

『奈良県現代人物誌』奈良新報社 1924年
『新編 日本の歴代知事』歴代知事編纂会 1991年